

寂蓮の名所和歌集入集歌について

—『勝地吐懷編』『類字名所補翼鈔』『類字名所外集』を中心として—

半田公平

一

表題の『勝地吐懷編』『類字名所補翼鈔』『類字名所外集』は契沖著の名所研究書であり、この作品は里村昌琢編『類字名所和歌集』の補遺、訂正、増補をしたものである。『類字名所和歌集』の寂蓮入集歌については先に拙稿^{〔1〕}において考察を加えた。この三作品に寂蓮歌が増補されているのでその作品について検討を加える。最初にそれぞれの歌書の従来の研究を踏まえて、作品の成立、内容等についてまとめ、次いで寂蓮歌についてみる。本稿で採り上げる歌書は勅撰集及び私撰集等に入集している和歌を出典とする二次的撰集であり、独自歌は見出せないので、和歌を揭示し、採録歌の出典の確認、拙著・拙稿において既に考察した和歌については参照とした。

二

前掲の作品は『類字名所和歌集』の補遺、訂正、増補をしたものである。『類字名所和歌集』は里村昌琢の編に成るもの

である。昌琢は連歌師。天正二年（一五七四）〜寛永十三年（一六三六）二月五日、六三歳。連歌師昌叱の子、母は紹巴の女。別号、懷惠庵、拜北庵・什斎など。法橋に叙せられる。『昌琢句集』がある。成立は元和三年（一六一七）開板本に、「元和三曆 仲秋下旬 法橋昌琢判」とある。

伝本は、『国書総目録 第八卷』（昭和47年2月、岩波書店）、『私撰集伝本書目』（類題和歌集研究会・和歌史研究会編、昭和50年11月、明治書院）、千艘（村田）秋男氏編『類字名所和歌集 本文編』所収「類字名所和歌集」等によると、写本四点、元和元年刊本、元和三年古活字版、元和三年刊本、寛永七年刊本、同八年刊本、慶安二年刊本、承応二年刊本、寛文八年刊本、貞享四年刊本、嘉永八年刊本、慶応二年刊本等数多く現存している。また、『類字名所和歌集拔書』写本二点、寛永八年版、慶安二年版、刊年不明版がある。千艘（村田）秋男氏『類字名所和歌集 本文編』（昭和56年1月、笠間書院）は元和三年版を底本として翻刻が成されている。

内容は、『古今和歌集』より『新続古今和歌集』に至る勅撰二十一代集から諸国の名所を詠み込んだ和歌を抄出したものである。全国を畿内、五畿、東海道以下七道に分け、七道を細分して六十三箇国とし、八八七箇所に及ぶ名所を掲げ、その配列はいろは順で、おおむね国名順、撰集順に収録している。本文七巻で、総歌数八八二一首（重出歌を含む）を収める。

三

表題の作品の著者である契沖については従来数多くの研究が成されている。全集として朝日新聞社版『契沖全集』^②、岩波書店版『契沖全集』^③が刊行されている。契沖の伝記・書誌・思想・学説の系統的研究として久松潜一氏^④の一連の研究がある。その後、築島裕・林勉・池田利夫・久保田淳各氏『契沖研究』^⑤の著書がある。研究文献は朝日版『契沖全集』に「明治以後契沖に関する著書論文目録」が掲載されているが、その後五十余年間の業績を『契沖研究』^⑤所収「契沖研究文献目録」とし

て掲載されている。その後のものとして、『大阪の和学』⁶⁾、井野口孝氏の研究がある。

従来の研究成果を踏まえて契沖について記す。

契沖は寛永一七年（一六四〇）尼崎で生まれ、元禄一四年（一七〇一）一月二十五日、六二歳で没した。近江国下川氏の出で、祖父元宣は加藤清正に仕えた。父は元全、摂津国尼崎の青山大蔵少輔に仕えて二五〇石の武士であったが浪人した。母は間氏、細川家家臣の女で契沖は三男であった。慶安三年（一六五〇）十一歳の時、出家して大阪今里の妙法寺（真言宗）の丰定の弟子となり、承応元年（一六五二）十三歳の時剃髪して高野山に入り、東室院の快賢に就き、寛文三年（一六六三）二四歳の時阿闍梨位を得た。大阪生玉の曼陀羅院の住職となった。この寺に在る間に下河辺長流と相識した。二七・八歳の頃寺を去り、長谷寺、室生寺・吉野・葛城等を経て高野山に戻った。寛文九年（一六六九）三十歳頃から和泉国久井村の辻村家、池田万町の伏屋家に寄寓して和漢の書を読んだ。このことが古典研究家としての基盤を作ることになった。延宝六年（一六七八）三九歳の時妙法寺に戻り住職となった。元禄三年（一六九〇）五一歳の時妙法寺を弟子の如海に譲って、高津の円珠庵に移った。円珠庵時代に多くの著作を成し、元禄一四年（一七〇二）一月二五日、円珠庵で没した。

著作は数多くあるが、下河辺長流が水戸家に請われて着手した万葉集の注釈を代わって執筆した。天和三年（一六八三）四四歳の時『万葉代匠記初稿本』を起稿し、元禄三年（一六九〇）五一歳の時『万葉代匠記精撰本』を完成した。

円珠庵時代の代表的な著述として、元禄四年（一六九一）『和字正韻』『古今和歌六帖』、同五年（一六九二）『勝地吐懷篇』・一卷本』『百人一首改観抄』『古今余材抄』『日本後紀』、元禄八年（一六九五）『和字正韻』『河社』、元禄九年（一六九六）『源注拾遺』『勝地吐懷篇』三卷本、元禄一〇年（一六九七）『類字名所補翼鈔』『後拾遺集難評』、元禄一一年（一六九八）『類字名所外集』、元禄一二年（一六九八）『新勅撰集抄』『円珠庵雜記』等がある。

家集として延宝九年（一六八一）『契沖延宝集』と生涯の歌を集めた『漫吟集』がある。

以上の著作の内、地名・歌枕研究書として、『勝地吐懷編』（一卷本・三卷本）『類字名所補翼鈔』『類字名所外集』『勝地

通考目録』『大和国地名類字』があるが、表題の三集を採りあげる。

四、『勝地吐懷編』

この作品の研究については、前掲『契沖全集』⁽³⁾（第十二巻 名所研究二）所収の久松潜一・久保田淳両氏の解説、久松潜一氏『契沖伝』、他に尾崎雅嘉・佐村八郎・福井久蔵・有吉保・千艘（村田）秋男各氏の考察がある。

この作品には一巻本と三巻本とがある。一巻本は元禄五年（一六九二）に成立し、昌琢編『類字名所和歌集』の誤りを訂正し増補している。三巻本は元禄九年（一六九六）に成立し、名所の項目及び証歌を増補している。「石蔵」以下「須佐入江」まで、名所及び二十一代集の例歌を掲げ、六国史、万葉集その他を典拠としてその所在を考証したもので精細である。『勝地吐懷編』は前掲『契沖全集』第十一巻 名所研究一。第十二巻 名所研究二^(3,15)に本文・解説が収められている。一巻本の底本は大阪府立図書館蔵本、三巻本の底本は圓珠庵蔵・大阪府立図書館寄託本である。寂蓮歌はその本文に拠る。一巻本には収められてなく、三巻本に以下の歌が証歌として増補されている。

勝地吐懷編上 に

仁和寺 山城

仁和寺嘉王院にて、梅花久薫といふ事を

寂蓮法師

夫木三
あたりまで三室の山はのとかにて松風かほるやとのむめかえ

集付は「夫木三」とあり、『夫木和歌抄』（巻三・春部三、梅、七一二番）に、

（仁和寺教王院にて、梅花久薫といふことを） 寂蓮法師

あたりまで三室の山はのどこにて松かぜかをる宿の梅が枝

とあり、詞書の「教王院」静嘉堂文庫本は「嘉王院」とある。『夫木和歌抄』より撰集している。『寂蓮集』（雑纂本・四三番）に入集しており、

仁和寺教王院にて、梅花久匂といふ心を

あたりまでみむろの山はのどかにて松風にほふ宿の梅がえ

とあり、詞書「梅花久薰」は「梅花久匂」、第四句「松風かほる」は「松風にほふ」と異同がある。拙著⁽¹⁶⁾参照。

勝地吐懷編中 か

（柿本寺依清輔家集 大和 山辺郡）

おなじ墓尋侍けるに、柿本明神にまうてゝ、よみ侍ける 寂蓮法師

同（玉葉 雑五）
古き跡を苔の下まで尋すは残れるかきのもとをみましや

集付は「同（玉葉 雑五）」とあり、『玉葉和歌集』（巻十八・雑五、二六〇五番）に、

おなじ墓たづね侍りけるに柿本明神にまうでてよみ侍りける 寂蓮法師

ふるき跡を苔のしたまでたづねずは残れるかきのもとをみましや

とある。

「おなじ墓」は『勝地吐懷編』の前歌に

人麿墓に卒都婆たて侍るとて、かきつけ侍ける 清輔朝臣

玉葉 雑五
世をへてもあふへかりける契こそ苔の下にも朽せさりけれ

清輔朝臣家集云、大和国岩上といふ所に、かきのもと寺といふ所の前に、人麿墓ありといふを聞て、そとはを立たり。

柿本人麻呂墓とするしつけて、かたはらに此哥をなんかきつけゝる^{歌如上}。其後、村の者ともあまた、あやしき夢をなん

みたりける

とあり、人麿の墓のことである。清輔歌の集付に「玉葉 雜五」とあり、前掲『玉葉集』の寂蓮歌の前歌（二六〇四番）に、

人麿の墓に卒都婆たて侍るとてかきつけ侍りける 清輔朝臣

よをへてもあふべかりけるちぎりこそ苔のしたにもくちせざりけれ

とある。前掲の如く『玉葉集』より撰集しているが、『寂蓮集』（部類本・七七番、雜纂本・二二一番、重出歌）に入集している。

清輔歌の左注「清輔朝臣家集云——」は、『清輔朝臣集』（四四四番）に次の如くある。

やまとの国いそのかみといふところに、かきのもと寺といふ所のまへに、人丸がはかありといふをききて、そとばをたてけり、かきのもとの人まる墓としるしつけて、かたはらにこの歌をなむかきつけける

よをへてもあふべかりける契こそけのしたにも朽せざりけれ

其後むらのものどもあまたあやしき夢をなむみたりける

とある。清輔歌の詠作年時は明確ではないが、清輔が供養の卒塔婆を建立したのを契機にして人麿塚を訪れる人が多かった。寂蓮もその内の一人である。拙著^①参照。

勝地吐懷編下 ま

松川

十題百首

寂蓮

夫木^{三十八}秋の田をかものかはせにこぎよせてたれもちとせをまつの川ふね

集付は「夫木三十六」とあり、『夫木和歌抄』（卷三十四・雜部・十六、神社付社・賀茂、一六〇二一番）に、

十題百首

寂蓮法師

秋の田をかものかはせにこぎよせてたれもちとせをまつのかはぶね

とあり、建久二年（一一九二）閏十二月四日披講の『左大将良経邸十題百首』（神祇部）の詠歌である。拙著⁽¹⁶⁾参照。

五、『類字名所補翼鈔』

この作品の研究については、前掲『契沖全集』⁽³⁾（第十二巻 名所研究二）所収の久松潜一氏・久保田淳氏⁽⁸⁾の解説、久松潜一氏⁽⁹⁾『契沖伝』、他に尾崎雅嘉⁽¹⁰⁾・佐村八郎⁽¹¹⁾・福井久蔵⁽¹²⁾・有吉保⁽¹³⁾・千艘（村田）秋男⁽¹⁴⁾各氏の考察がある。

この作品は元禄一〇年（一六九七）四月に成立し、昌琢『類字名所和歌集』の補遺、増訂をした書である。二十一代集以外の歌集、万葉集・夫木抄等の私撰集、貫之集・能宣集等の私家集からも採歌している。

『類字名所補翼鈔』は前掲『契沖全集』第十一巻 名所研究一。第十二巻 名所研究二^(3・15)に本文・解説が収められている。底本は圓珠庵蔵・大阪府立図書館寄託本である。寂蓮歌はその本文に拠る。

類字名所補翼鈔 第二 か

賀茂（河）川 神山 同（山城）愛宕郡

寂蓮

夫木^{三十六}十題百首
秋の田をかもの川瀬にこきよせてたれもちとせをまつの川舟

この歌は前掲『勝地吐懷編』の「松川・秋の田を」に増補されている。その項参照。

類字名所補翼鈔 第三 た

高圓 山野宮 大和添上郡
万葉哥廿七八首略之

寂蓮

同（夫木^{三十二}）
高圓の尾上の里に雪深し猶ふりゆかむ跡をこそおもへ

寂蓮の名所和歌集入集歌について

集付は「同（夫木三十一）」とあり、『夫木和歌抄』（卷三十一・雑部・十三、里、一四六四一番）に、

前大納言忠良卿家会、雪歌

寂蓮法師

たかまどのをのへのさとに雪ふかし猶ふりゆかんあとをこそ思へ

とあり、「前大納言忠良卿家会」とあるが、『寂蓮集』（雑纂本、五二番）に、

故郷雪、前大納言殿御会

高円のをのへの里は雪ふかしなほふりゆかん跡をこそおもへ

とあり、文治五年（一一八九）一二月『良経家雪十首歌』の詠歌である。拙著⁽¹⁶⁾参照。

田中井戸

寂蓮

かはつ鳴田中の井戸に日はくれておもたかなひく風わたるなり

集付は「夫木」とあり、『夫木和歌抄』（卷八・夏部二・夏雑、三三〇四番。卷三十・雑部十二・田家、一四五〇五番）に、

百首、夏歌

寂蓮法師

かはづなく田なかのゐどにひはくれておもだかなびく風わたるなり（三三〇四）

百首、夏

寂蓮法師

かはづなく田中のゐどに日はくれておもだかなびく風わたるなり（一四五〇五）

とあり、「百首」とあるが、いつの百首歌か詠歌年時、出典は未詳である。拙稿⁽¹⁷⁾参照。

この歌は『松葉名所和歌集』（第四、田中井戸、三九六一番）に入集している。拙稿⁽¹⁾参照。

類字名所補翼鈔 第四 む 室泊

寂蓮

君か代は真如くちせぬむろの浦に慈氏の朝日の光さすまで^{夫木}

今案、是は守覚法親王家五十首の中の賀の哥にて、むろの浦は^(末)八おむろによすとてV室戸をよみ損せられたりと見えたり

集付は「夫木」とあり、『夫木和歌抄』（卷三十六・雑十八・賀、一六八〇七番）に、

喜多院入道二品親王家五十首、祝 同（寂蓮法師）

君が代は真如くちせぬむろの内に慈氏のあさひのひかりさすまで

とある。詞書にある如く、建久九年（一一九八）一二月九日以降から正治元年（一一九九）三月二三日まで成立の『守覚法親王家五十首』（雑・祝、八四四番）の詠歌である。『寂蓮集』（雑纂本、一四二番）にも入集している。契沖の指摘にもあるように、第三句「むろの浦に」を「室戸」と採り、「室泊」の項に採歌しているが、「室の内」（僧房）の誤りである。拙著⁽¹⁶⁾参照。この歌は『松葉名所和歌集』（第六、室泊、五〇四三番）に入集している。拙稿⁽¹⁾参照。

第四 お 大嶽

寂蓮

山のはもまたならひなき大たけにさこそは月のくまなかるらめ^{拾玉集}

集付は『拾玉集』とあり、同集（五一二七番）に、

山のはも又ならひなきおほたけにさこそは月のくまなかるらめ

とある。文治五年（一一八九）九月、慈円と寂蓮との贈答歌で、無動寺よりの詠歌である。『拾玉集』（第五、五一二五番〜五一三四番）、『寂蓮集』（雑纂本、九六番〜一二四番）に入集している。拙著⁽¹⁶⁾参照。

大和太 同（近江）滋賀郡

寂蓮

統古今冬
かち人のみぎはの氷ふみならしわたれとぬれぬしかの大わた

集付は「統古今冬」とあり、『統古今和歌集』（巻六・冬、六三七番）に、

守覚法親王家五十首歌に

寂蓮法師

かち人のみぎはのこほりふみならしわたれどぬれぬしがのおほわだ

とあり、『守覚法親王家五十首』（冬・三四番）の詠歌である。この歌は『類字名所和歌集』（第六）に、

滋賀 山浦都花園
濱故郷津大和田

近江 滋賀郡

同冬（統古今） かちひとの汀の氷ふみならし渡れとぬれぬしかの大輪田 寂蓮法師 七九九七

とあり、『類字名所補翼鈔』は『類字名所和歌集』を補遺、増訂した書であり疑問である。その他『歌枕名寄』（巻廿二、近江国、志賀篇、浦、大回田、五九八四番）、『勅撰名所和歌要抄』（巻十一、浦、近江国、滋賀大輪田、滋賀郡）、『勅撰名所和歌抄出』（上、滋賀大輪田、近江、志賀郡、七八〇番）に採録されている。

類字名所補翼鈔 第六 み

三渡

寂蓮

みわたりの月は秋なる浪の上にまたほに出ぬ伊勢の濱荻

この歌は集付は付されていないが、建仁元年（一二〇一）四月三十日、後鳥羽院が鳥羽殿で披講された『鳥羽殿影供歌合』（三番、海辺夏月）を出典とし、家隆と対し、勝と判定されている。初句「ながむれば」と異同がある。この歌は『雲葉和歌集』（巻四・夏、三六六番）、『歌枕名寄』（巻十七、三渡、四七三六番）、『松葉名所和歌集』（巻十一、安濃、八〇五四番。巻十三、三渡、九九三五番）、『増補松葉名所和歌集』（巻八、三渡、一五三二七番）に入集している。

類字名所補翼鈔 第八

かつらきや高天の桜咲にけり立田のおくにかゝる白雲

の詠歌「葛城」について寂蓮歌を引用して次の如く記している。

(上略) 後嵯峨院御製に

葛城の峯の霞出る日になこの濱江の氷とくらん

名兒濱は住吉のあたり、これより葛城山は異の方なれば、初春の比に応せすやあらん。叡慮をいたしたまはさりけるなるへし。寂蓮法師

かつらきや高天の桜咲にけり立田のおくにかゝる白雲

下句は、古今に、たつたのおくの鶯の声といふを、取用られたり。立田山は大和にて、東を表とせる山なれば、奥といはゝ、西の方、河内にさかひたるほとをそ申へき。広瀬、葛下の二郡を隔て、葛上郡にはるかにのきたる山を、龍田の奥とよまれたるは、おく、くちのことわりもたゝす、荒涼なれと、哥のいかめしきにかくれて、昔よりかやうにかたふくる人なかりき(下略)

とあり、寂蓮歌を引用し説明している。この歌は『類字名所和歌集』(第二・一九六五、葛城・大和。二八八六、龍田 大和平群郡。三〇〇八、高天 大和^{葛木郡})の三箇所に掲載されており、建仁二年(一一〇二)三月二十二日、仙洞御所(和歌所)において催された『三体和歌会』の詠歌であり、『新古今集』(卷一・春上、八七番)に入集している。

第八た

高市宮

寂蓮

^{万代}しらすりし昔さへこそこひしけれどかちの宮に月をなかめて

集付は「万代」とあり、『万代和歌集』(卷十五・雑一、二九八九番)に、

橘寺にまうでて月を見て

寂蓮法師

しらざりしむかしさへこそひしけれたけちのみやの月をながめて

とある。『寂蓮集』（部類本、六二番）に、

古郷の方に、ふるき寺拝みけるに、橘寺のほとりに泊りたる夜、月のいとおもしろかりければ
しらざりし昔さへともこひしけれたけちの宮の月を詠めて

とある。第四句「たけちの宮」とある。この歌は『夫木和歌抄』（卷二十五、雑七、一一四八三番。卷三十、雑十二、一四二九七番）、『歌枕名寄』⁽¹⁹⁾（卷十一、高市宮、三三〇三番）、『松葉名所和歌集』⁽¹⁾（卷五、高市宮、三三八六）に入集している。
⁽¹⁶⁾
⁽¹⁷⁾
⁽¹⁸⁾
拙著・拙稿参照。」

第八 ね

根山

撰津 夫木
今案非名所

夫木十二
文治の比、ひえの山より、寂蓮法師のもとへつかはしける十首中

慈円

聞袖の露のふるさもある物をね山のすそのさを鹿の声

寂蓮

同返し（拾玉）
をしかなく同じね山のすそなれと聞わく袖ぞ露も置そふ

この歌は前掲「第四 お 大嶽」の項の「山のはも——」と同じ時のものである。『拾玉集』（五二二九番）に、
をしかなくおなじ外山のすそなれどききわく袖ぞ露もおきそふ

とある。第二句「外山」とある。『寂蓮集』（雑纂本、一〇四番）に入集している。拙著⁽¹⁶⁾参照。

（寂蓮）

同家集 鹿
秋の野をね山のすそに分なして袖にかたしく棹鹿の声

集付は「同 家集 鹿」とあり、『寂蓮集』（雜纂本、二九番）に、

旅泊鹿

秋の野をね山のすそに分なして袖にかたしくさを鹿のこゑ

とあり、何時の年時の詠歌か未詳である。この歌は『夫木和歌抄』（卷十二・秋部三、鹿、四八四〇番）に入集している。

六、『類字名所外集』

この作品の研究については、前掲『契沖全集』⁽³⁾（第十二卷 名所研究二）所収の久松潜一氏・久保田淳氏の解説、久松潜一氏『契沖伝』、他に尾崎雅嘉・佐村八郎・福井久蔵・有吉保・千艘（村田）秋男各氏の考察がある。

この作品は元禄十一年（一六九八）十一月に成立し、昌琢編『類字名所和歌集』の補遺、増訂をした書である。二十一代集以外の歌集、夫木和歌抄等の私撰集、元真集・実方葉等の私家集、更級記等の日記からも採歌している。本書の編纂には宗恵編『松葉名所和歌集』が参考にされたとみられている。

『類字名所外集』は前掲『契沖全集 第十一卷 名所研究一。第十二卷 名所研究二』^(3・15)に本文・解説が収められている。

底本は圓珠庵蔵・大阪府立図書館寄託本である。寂蓮歌はその本文に拠る。

類字名所外集 第一伊行

出雲山 川

寂然

出雲河ふかきみなとをたつぬれははるかにつたふわかの浦浪

集付は「同廿四（夫木）」とあり、『夫木和歌抄』（卷二十四・雜部六、河、一〇九一八番）に、

いづも河、出雲

いづものきづきの宮にまうでて、いづも河のほとりにて

寂蓮法師

いづも河ふるきみなとをたづぬればはるかにつたふ和歌のうら波

とある。作者名「寂然」とあるが「寂蓮法師」の誤りである。『寂蓮集』（雜纂本、二〇三番）に、

出雲のいつきの宮に参りて、いづもの川のほとりにて

出雲川ふるきみなとをたづぬればはるかにつたふ和哥の浦なみ

とあり、文治六年（建久元、一一九〇）春、出雲大社参詣の折の詠歌である。建久二・三年（一一九一・二）頃成立の『玄玉和歌集』（巻一・神祇）に入集している。『松葉名所和歌集』を参考にしたかとされているが、同集（第一、出雲河、六八七番）に、

出雲河 出雲

出雲のきづきの宮にまふて、出雲川の辺にて

夫木 いづも河ふるきみなとを尋ぬればはるかにつたふわかの浦なみ

寂然

とあり、集付は「夫木」としながら作者名を「寂然」と誤っており、『夫木和歌抄』から採歌しないで『松葉名所和歌集』から採歌したものと思われる。『増補松葉名所和歌集』⁽²⁰⁾（巻之一、河、出雲川、九一一番）に入集している。拙著・拙稿⁽¹⁶⁾参照。

第五 ま

松ノ川

山城 愛宕郡

寂蓮

夫木^{三十八}十題百首
秋の田をかもの川瀬にこきよせて誰もちとせをまつの川舟

集付は「夫木 三十六 十題百首」とあり、『夫木和歌抄』(卷三十四・雑部・十六、神社付社・賀茂、一六〇二一番)に、
十題百首 寂蓮法師

秋の田をかものはせにこぎよせてたれもちとせをまつのかはぶね

詞書に「十題百首」とあり、建久二年(一一九二)閏十二月四日披講の『左大将良経邸十題百首』(神祇部)の詠歌である。前掲『勝地吐懷編』(三卷本)の「松川・秋の田を」、『類字名所補翼鈔』(第二)「賀茂・秋の田を」に掲載されている。拙著⁽¹⁶⁾参照。

第七 す

すたちの小野

寂蓮

^{同五 六百番 (夫木)}
子を思ふすたちの小野に朝行はあかりへもゝやらすひはり鳴也

集付は「同(夫木)五 六百番」とあり、『夫木和歌抄』(卷五・春部五・雲雀、一八五一番)に、

同(六百番歌合、ひばり)

寂蓮法師

子を思ふすだちのをを朝夕にあがりもやらず雲雀なくなり

とあり、詞書に「六百番歌合」とある如く、建久四年(一一九三)秋『六百番歌合』(春中 雲雀 十八番)に入集し、顕昭と対し、勝と判定されている。『増補松葉名所和歌集』(す部 岡 巢立、岡 同(未勘)、一七二二三番)に入集している。拙著⁽¹⁶⁾・拙稿⁽²⁰⁾参照。

七

以上三集の他に『勝地通考目録』の「出雲」の項に寂蓮歌が掲示されているのでそれについて記す。前掲『契沖全集』^(3・15)に
抛る。底本は圓珠庵蔵、袋綴一冊本、大阪府立図書館寄託本に抛つて本文を記す。

出雲

出雲宮 (朱) △哥枕名寄伊勢
袖師浦 (朱) △不審

(朱) △誤ておくの海と詠す
飫宇 河原意宇
海郡

矢野神山 恋山

(朱) 新勅撰恋二 寂蓮法師

おふのうみのおもはぬ浦にこすしほの

さてもあやなくたつ煙かな

とあり、この歌は『類字名所和歌集』(第四)に、

飯宇海 同 (出雲)

新勅撰恋三 おふの海の思はぬ浦にこす塩のさてもあやなく立煙哉 寂蓮法師 四八三一

とあり、『新勅撰和歌集』(巻十二・恋二、七六〇番)より撰集している。「恋三」は「恋二」の誤り。詞書は「題しらず」とあり、詠歌年時、出典は未詳であり、『新勅撰集』が初出の入集である。『歌枕名寄』(巻三十、出雲国、飫宇海、七八二五番)、『勅撰名所和歌要抄』(巻九、海、出雲国、生海、一九番)、『勅撰名所和歌抄出』(下、海、生海、出雲、九四三番)に採録されている。拙著⁽¹⁶⁾・拙稿^(17・19・21)参照。

ここで以上のまとめをする。『勝地吐懷編』の一巻本には寂蓮歌は掲載されていない。三巻本に、「仁和寺 あたりまで——」「柿本寺 ふるき跡を——」「松川 秋の田を——」の三首が増補されている。『類字名所補翼鈔』には、「賀茂 秋の田を——」「高円 高円の——」「田中井戸 かはつ鳴」「室泊 君か代は——」「大嶽 山のはも——」「大和太 ちか人の——」「三渡 みわたりの——」「高市宮 しらさりし——」「根山 をしかなく——」「根山 秋の野を——」の十首が増補されている。『類字名所外集』には、「出雲川 出雲河——」「松ノ川 秋の田を——」「すたちの小野 子を思ふ——」の三首が増補されている。『勝地通考目録』には、「出雲 飢宇海 おふのうみの——」の一首が増補されている。

『類字名所補翼鈔』（第四）の「大和太 ちか人の——」は『類字名所和歌集』（第六・七七九七）に採録されている。同（第八）の「葛城 かつらきや——」も『類字名所和歌集』（第二・一九六五、第三・二八八六、三〇〇八）に採録されており、疑問である。

『類字名所外集』（第二）「出雲川 出雲河——」の詠歌は作者名を「寂然」とするが寂蓮歌である。

以上三集の採録歌は『新勅撰集』（一首）『続古今集』（一首）『玉葉集』（一首）、『万代集』（一首）『夫木和歌抄』（九首）、『拾玉集』（一首）、『六百番歌合』（一首）等より増補している。

注

- (1) 拙稿「寂蓮の名所和歌集入集歌について」——『類字名所和歌集』『松葉名所和歌集』を中心として——(二松學舎大学論集「第四十七号、平成16年3月」)。
- (2) 新村出・武田祐吉・久松潜一・佐佐木信綱・橋本進吉共編『契沖全集』全一一卷。(大正15年、昭和2年、朝日新聞社)。
- (3) 久松潜一監修。築島裕・林勉・池田利夫・久保田淳共編『契沖全集』全二六冊。(昭和48年1月、昭和51年5月、岩波書店)。
- (4) (A)久松潜一、注2『契沖全集』『伝記及伝記資料』(第九卷)。
(B)同『契沖の生涯』(昭和17年1月、日本文化名著選、創元社)。
(C)同『契沖』人物叢書(昭和38年8月、吉川弘文館)。
(D)同『契沖伝』『久松潜一著作集』(第12巻、昭和44年10月、至文堂)。
(E)同『契沖伝』(昭和51年10月、至文堂)。
(F)同『契沖』人物叢書新装版(平成元年8月、吉川弘文館)。
- (5) 築島裕・林勉・池田利夫・久保田淳共著『契沖研究』(昭和59年1月、岩波書店)。「契沖研究文献目録」。
- (6) 『大阪の和学』付、大阪国文談話会の歩み。大阪国文談話会編(昭和61年7月、和泉書院、上方文庫3)。
- (7) 井野口孝『契沖学の形成』(平成8年7月、和泉書院)。
- (8) 「注3」『契沖全集』第十二巻「名所研究二」解説、一、契沖の名所研究の意義 久松潜一。二、名所研究書の書誌 久保田淳。
- (9) 久松潜一「注4C」の著書、第六 隠棲時代——五、歌枕研究。「注4・E」の著書、第二編 書誌的研究。第二章・三、勝地吐懷編・類字名所補翼鈔と名所研究。
- (10) 尾崎雅嘉『群書一覽』巻之六名所類、「類字名所補翼鈔」「類字名所外集」「勝地吐懷編」の項。(享和二年六月)。
- (11) 佐村八郎『増訂国書解題』(明治30年11月、吉川弘文館)。「勝地吐懷編」「類字名所補翼鈔」「類字名所外集」の項。
- (12) 福井久蔵『大日本歌書綜覧 上巻』(大正15年8月、不二書房。昭和49年5月、再版、国書刊行会)。「第一・六、名所、勝地吐懷編・類字名所補翼鈔・類字名所外集」の項。
- (13) 有吉保編『和歌文学辞典』(昭和57年5月、桜楓社)所収「勝地吐懷編・類字名所補翼鈔・類字名所外集」の項。
- (14) (A)千艘(村田)秋男「勝地吐懷編・類字名所補翼鈔・類字名所外集」(『和歌大辞典』昭和61年3月、明治書院)。
(B)同「勝地吐懷編」(『日本古典文学大辞典 第三巻』(一九八四年、四月、岩波書店)。
- (15) 「注3」『契沖全集』第十一巻「名所研究一」校訂 久保田淳。『契沖全集』第十二巻「名所研究二」解説 久松潜一・久保田淳。校訂 久保田淳。
- (16) (A)拙著『寂蓮法師全歌集とその研究』(昭和50年3月、笠間書院)。
(B)同『寂蓮の研究』(平成8年3月、勉誠社)。
- (17) 拙稿「寂蓮の『夫木和歌抄』入集歌について——「四季部」所収歌を中心として——」(『語文』第99輯、平成9年12月)。
- (18) 拙稿「寂蓮の私撰和歌集入集歌について——『雲葉和歌集』『拾遺風林和歌集』『二八要抄』『六華和歌集』『新三井和歌集』を中心として——」(二松學舎大学論集「第42集、平成11年3月」)。
- (19) 同「寂蓮の『歌枕名寄』入集歌について」(二松學舎創立百二十五周年記念論文集、平成14年10月)。
- (20) 同「寂蓮の『増補松葉名所和歌集』入集歌について」(『語文』第119輯、平成16年6月)。
- (21) 同「寂蓮の名所和歌集入集歌について——『勅撰名所和歌要抄』『勅撰名所和歌抄出』『名所諸抄』『同名歌枕名寄抄』を中心として——」(二松學舎大学人文論叢「第71輯、平成15年10月」)。